Gofukucho

呉服町 コンシェルジュ

お街のことなら私たちにお任せ!

呉服町の魅力を熟知した女性部メンバーが
創意工夫や知恵を集めて呉服町から静岡を元気にします!

Concierge

呉服町の歴史をメンバーそれぞれが独自のルートでリサーチ!
とっておきの"旬ネタ"を持ち寄りました。

昭和三十年代に建てられた不燃化共同ビルには防火壁としての役割も!

静岡呉服町名店街 理事長
中村 陽史

呉服町には、昭和15年の静岡大火と20年の空襲、2度の大火により、町のほとんどが燃えてしまうという、厳しい試練がありました。戦後、県や市の指導のもと、商店主が一体となり、昭和32から33年にかけて耐火性のある建築「不燃化共同ビル」を建設、官公庁エリアを守る防火壁の役割を担うため、4階建てで建てられたそうです。

昭和33年6月25日落成

YAWATAYA
長井がレポート

完成後は県と共同で設えた4階建てビル(ハード)に商人の知恵(ソフト)を融合させようと、張り出した庇で鮮まるどのイベントを開催したり、当時は珍しい共同チラシを発行するなど、賑わい創出の拠点としても成果をあげました。当時のチャレンジ精神を今後の呉服町の発展にも生かしていきたいですね。

伝説的デザイナー「倉俣史朗」が呉服町でも店舗デザインを手がけていた!

SANADAYA
大石がレポート

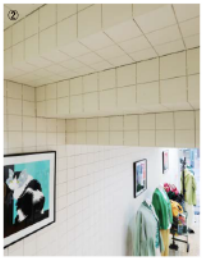
倉俣史朗(1934-1991)は戦後日本を代表するデザイナー。個性的かつ革新的な家具や店舗空間などで時代を牽引した。静岡との縁が深く、60年代半ばから80年代にかけて、静岡の数多くの商業空間を手がけた。没後30年以上が経った今も、彼の作品や作風は色褪せることなく、若い世代からも熱い視線を注がれ、メディアでも数多く取り上げられている。

撮影:小川隆之

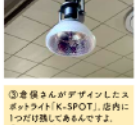
呉服町とも深い関係にあった倉俣史朗さん。静岡市で初めて手がけたお店は「タカラ堂」さんの店内ディスプレイだったようです。当店「SANADAYA」の内装デザインも倉俣さんによるもの。取材にご協力いただいた静岡市美術館の学芸員の伊藤さんからは、「商業店舗は寿命が短く、本来なら壊されていてもおかしくありません。にも関わらず、倉俣さんがデザインした空間がこれだけ残っているのは全国的にも珍しく、呉服町が静岡市の繁華街として長年栄え続けているからこそだと感じました」との言葉をいただきました。

静岡市美術館では倉俣史朗と静岡のつながりを現在リサーチ中。彼が内装を手がけたバー「コンプレ」を会場に、当時の関係者らを招いてトークイベントも行いました。2024年秋頃にはそれらをまとめた小企画アーカイブ展を開催予定とのことです。

①父の倉俣愛は店内に留まらず、彼がデザインした椅子「Apple Honey」を購入し、自宅でも愛用していました。脚のキャスターは父が取り付けたもの。今となってはいい思い出です(笑)



②SANADAYA店内の天井と壁。現在は改修されていますが、同素材を使って空間を一体化させたデザインコンセプトに"倉俣イズム"の名残りを感じます。



③倉俣さんがデザインしたスポットライト「K-SPOT」。店内に1つだけ残してあるんです。
④まるでオブジェのようなエントランスの取っ手。独特の浮遊感は倉俣さんを象徴する作風です。

倉俣さんのデザインをこまなく愛した父のたっての希望で、改装を重ねた今もなお、店内の至るところに倉俣イズムを踏襲しています。彼がデザインした椅子「Apple Honey」もSANADAYAウインドウに展示しています。この機会にぜひご来店ください!(4/7まで)

呉服町で見つけた歴史物語 Vol.1

新札の顔、渋沢栄一が「お泊りさん」として下宿したのは現・呉服町二丁目!

三保原屋
深沢がレポート

明治維新後、駿府(静岡)へ大挙して移住した旧徳川幕臣とその家族の多くは、寺社や駿府商人、豪農の屋敷などを間借りし、「お泊りさん」と呼ばれたそうです。渋沢栄一もその一人として呉服町五丁目(現・呉服町二丁目)で下駄屋を営んでいた川村家に下宿。昭和49年発刊の『静岡中心街誌』には、渋沢さんが川村家の長男に手伝わせて、静岡商法会所の目論見書を作成した、との記述が見られます。川村家は現在のSANADAYA辺りにあったようです。

参考資料『静岡中心街誌』
発行:静岡中心街誌編集委員会

『女性部』活動内容

月1回、女性部メンバー約20人で意見交換。お客さま目線で企画・編集した「逸品カタログ」や「お街ゼミな〜ら」が大好評。女性の感性を生かしたアイデアで、呉服町を盛り上げています!

SHIZUOKA 呉服町

静岡呉服町名店街は持続可能な開発目標(SDGs)を支援しています